海恋い

海難漁民と女たち

真尾悦子

海恋い

海難漁民と女たち

真尾悦子

筑摩書房

真尾悦子（ましお　えつこ）
1919年東京に生れる。旧制共立女子専門学校卒業。作家。主な著書に『たった二人の工場から』『旧城跡三十二番地』『土と女——出稼ぎ未亡人とその周辺』『地底の青春——女あと山の記』『いくさ世を生きて——沖縄戦の女たち』などがある。

海恋い——海難漁民と女たち

一九八四年三月二日　初版第一刷発行

著　者／真尾悦子
発行者／布川角左衛門
発行所／株式会社　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二—八
電話東京二九一—七六五一（営業）
二九四—六七一一（編集）
振替東京六—四一二三
郵便番号一〇一—九一
印刷／多田印刷　製本／積信堂

©真尾悦子　一九八四

Printed in Japan　0093-80238-4604

乱丁・落丁本の場合は，御面倒ですが小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

海恋い——海難漁民と女たち　目次

花咲へ　7
荒天　16
懐妊　23
紅い椿　30
北転船　39
団欒　49
遭難　58
自転車旅行　72
網外し　84
国後生まれ　95

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ノサップ岬 107
投げマッカ 121
棒手振り 133
拿捕の海 156
宝引き 175
蓮葉氷 183
花咲灯台 192
カピタンさん 205
出発 212
あとがき 227

カバー写真／志賀芳彦
表紙・扉／いせ辰千代紙

海恋い——海難漁民と女たち

花咲へ

地図でみる北海道は、魚のカレイに似ている、と多江(たえ)は思った。

夜中に青森へ着き、連絡船に乗りついで、四時間。うす暗い明け方に、ようやくその尻尾にあたる函館まできた。旅はまだ二分の一にも達していない。

「あしたから四月だってのに、やっぱり北海道は寒いなあ、光男オ」

「母ちゃん、ぐずぐずしてッと席取れねえよ」

長身の彼は、水色ジャンパーの衿(えり)を立て、荷物を横かかえにしてホームを走った。

窓側の座席に落ちつくと、多江はビニール製のボストンバッグから地図を出した。手摺(てず)れて、折り目が切れはじめていた。花咲(はなさき)へ引っ越すことに決めてから、何度眺めたかしれなかった。珍しい地名の一つ一つにも、いまはふしぎに親しみを覚えた。

苫小牧。カレイの、尾ビレのあたりを通過したのか、と彼女は地図に眼を近づけた。素直な長い髪をうしろに束ね上げてパチンと止めた衿あしが、さむざむと白い。

「札幌、岩見沢、滝川、旭川、と、北海道の真ン中より北のほうをぐるりッと遠回りするんだもんな。何ぼ特急だていっても時間かかるわけだ」

ポケット版の時刻表と腕時計を見くらべていた光男がつぶやいた。

多江は、六年前にも一度きていたが、しかし、彼女は途中の駅名や景色など何も覚えてはいない。函館から釧路への直行列車はほかにはないのだ。ただ、ただ、焦れったかった。夫の乗っていた大型漁船が、花咲沖で消息を絶った、翌々日であった。

列車は、カレイの腹の中ともいうべき内陸部を十二時間も走ってから、ふたたび太平洋側へ出た。エラぶたの動くような位置の、釧路である。一時間余も待って乗り換えた鈍行は、午後四時七分にようやく発車した。

背中が痛かった。体を伸ばしながら車内を見回すと、ゴム長の男や、襟巻ですっぽり頬かむりをした女などが多かった。扉のそばでは、数人の高校生がふざけていた。みんな、近距離の乗客のようだった。

「あと三時間だよ、やっぱ、遠いなあ」

いよいよか、と多江は黙って窓に額を押し当てた。スラックスの裾口から寒気が這いのぼって

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

きた。膝にスカーフを巻きつけて外を見た。

眼の届くかぎり、枯野のような湿原地帯がつづいていた。前回は、ここを遭難者の家族として貸切りバスに揺られて通った。誰もが殺気立っていた。うつろな眼を据えて車内を行ったり来たりする人もあった。

こんなに淋しいところだったのか、と多江はおよそ変化のない風景を飽きることなく眺めていた。駅へ着くと、その周辺に数えるほどの人家がみえるが、あとはほとんど樹木もない湿原ばかりを走った。

気がつくと、乗客は降りる一方になっていた。厚床を過ぎ、海岸沿いに、落石、昆布盛と、ひきずるような走り方をした。車内には、もう彼女たちと頬かむりの老女二人しかいない。

薄闇の中に、仄白い波がしらが間近にみえた。ひときわ黒ぐろと迫るのは岩礁か、と眼を凝らした。恐ろしげな景観であった。

根室本線花咲駅へおりたのは、午後七時五分。砂利を敷いた短いホームは暗く閑散としていた。近づいてきた駅員が、無言で乗車券を受け取って去った。ホームに立つ白い標識に『花咲』という文字がうすぼんやりと見えた。しかしここは、その美しいひびきの名からはとても想像できない、うらぶれた駅だった。

列車は、もの憂げにカーブを描いて闇に吸い込まれていった。つぎが終着駅根室。福島県の、

常磐線平駅から、北海道東端、カレイの眼玉へんの花咲まで、ちょうど二十六時間かかったことになる。

待合室も、囲いの柵らしいものもない、古い民家のような裸の駅に、四方から冷たい風が吹きつけていた。木造駅舎の前には、屋根のある井戸がただ一つ。他に建物もなく、周囲は闇一色だった。

多江は、駅舎から洩れる薄明りに便箋をかざした。食堂〈浮舟〉のママさんが送ってくれた略図であった。駅の裏手へ出るようにと書かれていた。

ひろびろとした、暗い野っ原だった。なだらかな下り坂らしかった。枯れ草や石ころまじりの、歩きにくい道であった。

「淋しいとこだねえ」

「ン」

駅のそばに、人影はもちろん、家もなく、車一台通っていない。心ぼそくなった多江は、足をとめて子を見上げた。容赦のない風で砂ぼこりが頬を打った。

「まず、行ってみっぺ」

彼女は息をつめて荷物を持ち直した。光男は、風に押されてぐんぐんすすんだ。立ち木ひとつさえぎるもののない、一本道である。

ずっと先で、光男が手を振っているようだった。喘ぎながら追いつくと、荷物に腰をおろした彼が左下を指さした。

一段下がった平地に、大きな、白っぽい建物が見えた。灯りは点っていなかった。工場か、倉庫の類か。駅からもう二十分は歩いていた。

「やっと町へ入ったみたいだねえ」

そこから短い急坂を下ると、舗装道路へ出た。商店のような家もひっそりと戸を閉めていた。夜の早い町らしい。思わず振り返りながらさらに左へ折れた。坂下の角に、食堂〈浮舟〉の、灯りを入れた置き看板があった。

店の、前も横も、人通りのない広い道路で、その向こうは岸壁だった。船が数隻入っている様子。立ち止まって深く息を吸い込んだ。漁港独得の、あのなつかしいにおいである。

「花咲港だ、母ちゃん」

「ンだね」

とうとう花咲へきた、と二人は顔を見合わせた。前方の、やや高みにまたたいている灯りは、灯台であろうか。

店の短いノレンが音を立ててはためいた。顔を刺すような風であった。

思いきって格子戸をあけた。中央の土間をはさんで、右が小あがり座敷、左がカギの手のカウ

ンターで、切り株の椅子が十二、三脚。客が立て込んでいて声をかけにくかった。
「ア、小野さんでないですか？　こっちが空いてますから、どうぞ休んで下さい」
と、カウンターの端を指しているのはママさんなのであろう。勤め人の奥さん、という感じだった。短い髪に紺無地のセーター。固くるしいほどの標準語。
こまめに体の動くママさんは、酔客に〝ハーイ〟と返事をしておいて、光男の手に山盛りの牛丼を持たせた。〝お食べなさい〟は、空いた手の合図と、一瞬の目くばせで通じた。そのとき、カウンターの奥から白い上っぱりの人が現われた。
「おッ、マスター、カニはないのかい？」
客の濁み声に会釈をした彼は、柔和な眼顔で多江のまえへ膳を置いて去った。
やがて、隣りにいたねじり鉢巻の中年男が〝したら、ママさん、またな〟と、よろけながら切り株の椅子を離れた。小あがりのひと組も、立って何やら叫んでいた。
「海明けでね、漁が始まったもんだから、ちょっと忙しかったんですよ。アパートへご案内しましょう、すぐそこですから――」
浜木荘アパートは、浮舟の裏手、坂の途中にあった。木造で、錆びた鉄の外階段。二階も階下も四所帯ずつだが、多江の部屋は、二階、東側の奥だった。六畳と四畳半のふた間に、押入れ、簡単な流し台、そして便所。ビニールテープで目張りをした、腰高のガラス窓が二個所。赤茶け

た畳に、前住者が家具を置いた跡がくっきりと際立っていた。部屋代は一万円。

四畳半のほうに、先に送った荷物が積んであった。

「狭いけど、独身者が多いから気楽だと思いますよ」

多江はひたすらに頭を下げた。うっかり口をひらけばいわき訛りが飛び出しそうだった。彼女は、ママさんの標準語に気怯じしていた。

「ああ、それから、仕事のことですけどね。このへんは、ケイソン（鮭鱒）までのあいだ、どこもヒマなんですよねえ」

「はア」

「差し当っては、網外しなんかどうでしょうか。この向かいのハル子さんて人が、それでよかったらお世話しますって言ってました。やっぱり、船でご主人亡くした人です」

「はア」

「網外しってね、小野さんも浜の人だからご存知でしょうけど、岸壁で魚やザッパ外して、網をちゃんとさやめる（ととのえる）までやるんです。一時間いくらっていう、出面取り（日雇い）ですよ。そんなのでもいいですか？」

「ハイ、どうかよろしくお願いします」

「そうですか。あれは、寒くて、ゆるくない仕事ですからね。え？　あさってからですか？。じ

ゃ、そう言っときます。いっぱい着ていって下さいよ」

初対面である。だが、ママさんはまるで旧知のように多江の頼みごとをテキパキと処理して帰っていった。

所在なさそうに正座していた光男と二人で、あらためて部屋を見回した。母と子が住むのにはぜいたくなくらいだと思った。どのみち、見知らぬ町への移転は無暴にはちがいなかった。覚悟はしてきたつもりである。しかし、吹きっさらしの、暗い花咲駅へおりたときは、さすがに足がすくんだ。地の果てへきた、という感じさえした。それが、ママさんに会ってやや気持がゆるんだ。むしろ拍子抜けがしたようにほッとして、一度に疲れが出た。

ふとんを引きずり出して横になると、風の音が耳についてすっかり眼が冴えてしまった。あしたから根室の冷凍会社へ出勤する光男は、となりで健康そうな寝息を立てていた。

無理に眼をとじてみた。立て付けがわるいのか、風がはげしく窓を叩いてやまない。

きのうまで住んでいた、いわき市四倉町(よつくらまち)では、駅前の妙見さまの桜が、あと十日もすればひらく風情(ふぜい)だった。だが、花咲はまだ真冬である。ヒュウ、ウ、とうなって過ぎる風に思わずふとんを肩へ引っぱり上げた。眠るどころではなくなった。

いっとき、無気味な静けさがきたかとおもうと、こんどはカタコトとガラス戸が小刻みにふるえ始めた。人がけんめいにノックしているのに似ていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com